

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金

企画研究プロジェクトⅠ(教員自由企画型) 2015年度研究成果報告書

研究代表者	所属・職名	氏名
	コミュニティ福祉学部・教授	藤井 敦史
研究課題名	コミュニティ福祉学部インターンシップの効果測定と今後の課題について	
研究期間	2015年度	
研究経費	100千円	

【研究の概要】

1. 目的

立教大学コミュニティ福祉学部におけるインターンシップは、学部の実践的な学びの延長上にある多様性に富んだプログラムとして、2008年度の開始以来、独自の展開を行ってきた。しかし、近年のグローバル化や採用行動の変化といった環境変化に際し、これまでの成果を客観的に評価し、新たな課題への対応が求められる時期に来ている。そこで本プロジェクトでは、その効果と今後の課題について明らかにすることを目的とした。

2. 方法・内容

過去のデータから、履修学生が重視している傾向分析を行った。また、学生側からの効果測定として、過去の履修生に対するインタビュー調査を行い、「インターンシップによる、より良いキャリア設計とは何か」に関する一定の仮説を得ることを試みた。加えて、本学部が提供するプログラムが、学生の社会参加に関わる実践的な能力の形成に、どの様に寄与してきたのかを明らかにしつつ、学生のニーズに関する調査を行った。

3. 結果概要

過去のデータからは、「業界への理解促進」、「将来の仕事に対する具体的なイメージの構築及び方向性の明確化」を筆頭として、履修学生が重視している詳細が明らかになった。また学生側からの効果測定としては、「現状の様な実働10日の短期インターンシップ期間で分かることは本来的に大きくはないことを前提としつつも、インターンシップを通して”社会と自己への理解”を深め、”自らを語る機会”を増やすという意味において効果がある」という仮説を得た。そのうえで、本学部が提供するプログラムが、「社会の多様な実態や価値観」に触れることで、「社会とのギャップ」を知り、「自らの根拠を確認したり、固めること」に寄与していることも明らかになった。一方、学生のニーズについては、1) 多様な実習先の開拓、2) 適正なマッチング、3) 実習中のきめ細かなフィードバック指導、4) 時間厳守など本採用、実社会の基準に照らしての厳しさの追求、5) 経験の言語化を強化する指導、6) 1年次からの導入といった点が見出された。

4. 今後の課題・方向性

インターンシップ関連学会や、他大学・機関等で導入及び議論が進んでいる方向性の中で、今後本学部で検討すべき課題は、1) 低学年次からの開始、2) 産学連携によるPBL教育(課題発見解決型学習)としての取り組み、3) 中長期インターンシップ、4) 有給インターンシップの4点であることが判明した。

この方向性については、本プロジェクトで明らかになった、学生側が求める効果やニーズとの接点も見受けられる。そうした状況の中で、本学部の独自性を活かしつつ、より有効なインターンシップのあり方を具体的に実現していくことが、今後の課題である。